様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 18 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2006～2008
課題番号：18720085
研究課題名（和文）　イランロ承文芸の現地調査資料に関する解析用データベースの作成と民俗学的応用研究
研究課題名（英文）　Development of an Analytic Database for Field Study Materials of Iranian Storytelling and Folkloristic Applied Research

研究代表者
竹原　新（TAKEHARA SHIN）
大阪大学・世界言語研究センター・准教授
研究者番号：20324874

研究成果の概要：
イランの口承文芸に関するデータベースの作成、イランにおける現地調査およびこれを用いた民俗学的分析に係る作業を中心に行った。データベースの作成については、民俗学的分析などを行うために、統語情報の付加、意味属性情報の拡充を行い、一部のデータについて分析用の検索システムの精度を向上させた。また、イラン・イスラム共和国内において、フィールドワークによって口承文芸に関する現地調査を行った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,400,000	0	1,400,000
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	360,000	3,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論
キーワード：①外国語(中･英･仏･独除く)　②外国文学(中･英･仏･独除く)　③民俗学　④口承文芸　⑤フィールドワーク

１．研究開始当初の背景

イランの口承文芸資料に関して、英、仏、独などの研究者が、２０世紀初頭から散発的に調査を行ってきたが、各資料の分量が少ない上、収集の方式が統一されておらず資料としての信用度にばらつきがあった。こういった状況の中、研究代表者は平成 10 年度に現地調査を行い、その資料と研究を平成１３年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）により公刊（竹原　新、『イランの口承文芸－現地調査と研究－』(溪水社)、1 頁～942 頁、2001 年）した。同資料は、量だけでなく資料精度も本研究の計画段階では十分に高いものであった。本研究は、この資料の価値をさらに高めるためのデータベース化、および、その民俗学的研究への実用化という位置づけである。

その成果は、これまで研究代表者が行って

きた民俗学的研究についてさらに発展させることになると予測された。
　これまでテキストレベルでの本格的なデータベース化が行われてこなかったイラン口承文芸学の分野において、資料の整備および分析を着実に実施することにより、本研究が当該分野の内外の研究を主導する位置づけとなることを目指す。
　なお、本研究の直接の背景となるプロジェクト研究として、「イランの口承文芸に関する現地調査資料のデータ整形と民俗学的応用研究」(平成 15-17 年科学研究費補助金(若手研究(B))、研究代表者：竹原新）がある。

２．研究の目的
　研究代表者は平成 10 年度から 17 年度にかけて、断続的に、イランにおいて民話、伝説、現代伝説、伝承遊戯、歌謡、民間信仰等の口承文芸についてのフィールド調査を行ってきた。このうち平成 10 年度に収集した 202 例の資料について、平成 15-17 年科学研究費補助金（若手研究(B)）により、ペルシア文字の部分についてプレーンテキストの状態から単語単位へのセグメント化を行い、さらに、基本的な意味属性付与等、機械的な分析に耐えられるデータ整形を行った。
　本研究では、この資料について、統語情報を含めたさらに高度な段階のデータベースへと発展させ、これを用いて実際に民俗学的分析を行い、研究成果へ繋げることを目的とした。
　また、本研究は、民俗学の分野のみならず、言語学、イラン地域文化学、および、情報工学の各分野と密接に関連している。これらの学問領域を相互に融合させ、且つ、発展させることで、本研究で採る方法論を新しい学問分野としての定着を目指すことも目的とした。

３．研究の方法
　全研究期間を通じ概ね、イランの口承文芸に関するデータベースの作成、イランにおける調査およびこれを用いた民俗学的分析について、下記に示した方法を中心に研究を行った。なお、データ入力や単純な作業については、ペルシア語の知識を有する大学院生や学部学生を研究補助者として活用した。

(1)統語情報の付加：ペルシア語の単語単位でセグメント化された状態の XML 形式の口承文芸資料について、GDA 方式を応用する形で、依存関係、代名詞の照応先等の統語情報の増補を行った。GDA 方式を試験的にペルシア語に応用したところ、独自の対応が求められる部分があることが分かっていたため、始めから方法を固定化するのではなく、柔軟に変更ができる体制で作業を行った。

(2)意味属性情報の拡充：これまでの研究成果により、意味属性データの入力方法はほぼ確立しているが、これまでに入力した意味属性情報を補足・拡充した。必要に応じてデータ形式の変更を含めた改良を試みた。

(3)イランにおける調査：ペルシア語資料について確認が必要な点が頻出することが予測されたため、これに対応するため、イラン国内のテヘランおよびその近郊において補足的な調査を行った。また、これと同時に新規調査も行った。

(4)民俗学的分析：必要に応じてデータ形式の変更を行い、分析用の検索システムについて改良を行った。このシステムを用いて民俗学的観点からの分析をさらに進めた。

４．研究成果
　全研究期間を通じ、イランの口承文芸に関するデータベースの作成、イランにおける調査およびこれを用いた民俗学的分析に係る作業を行った結果、次に示す成果を得るに至った。

(1)統語情報の付加：３－(1)で示した方法に従い口承文芸データに統語情報を付加した。一通りの構造化を終えた段階であるが、一部のデータについては、次の(2)で示すように語義が特定できる形で意味属性情報にリンクされている。

(2)意味属性情報の拡充：これまでに入力した意味属性情報を補足・拡充した。具体的には外部辞書ファイル内において複数の語義がある単語について語義ごとにデータを分割した。これに対応して、試験的に一部の口承文芸資料の XML データ内に出現する単語について語義が特定できる形で外部辞書内のデータにリンクさせた。

(3)イランにおける調査：平成 18 年度および平成 20 年度にイラン・イスラム共和国内において、フィールドワークによって口承文芸に関する現地調査を行い、音声資料および画像資料を収集した。各年度における調査の詳細を次に示す。

①平成 18 年度の調査内容：イラン・イスラム共和国内において、口承文芸と民間信仰に関する現地調査を行い、資料を収集した。調査内容の概要は以下の通りである。

　調査内容−テヘラン州内においてフィールドワークを行った。この結果、以前のイランでの調査における不明箇所の確認調査を実

施した。また、音声資料を新規に収集した。新規に収集した資料の内容は次の通りである。

「カラスが鳴くと雪が降る」、「夜に雪だるまが魂を持つこと」、「靴下を履いて寝るとジンが来る」、「足を浮かすと喧嘩になる」、「夜に髪を櫛ですくこと」、「鶏を一緒に墓に入れる風習」、「入り口に座ること」、「ソフレに残るナンには幸がある」、「靴が背中合わせに重なること」、「足の痒みと旅」、「靴の中のタンポポ」、「霊柩車のタイヤの下に卵を置いて割る風習」、「絨毯に切った爪を落とすこと」、「同時に話し始めること」、「猫の妊娠」、「鉛筆を両方から削ること」、「魚の舌は吉のもと」、「ニンニクと病気除け」、「頭がぶつかると角が生える」、「ヨーグルトとニンニクを食べると害獣が寄らない」、「チェッレの夜にスイカを食べる風習」、「鳩の呪い」、「鳩は吉か凶か」、「人々の不誠実」、「妊婦が死者を見ると子供が邪視を持つという信仰」、「夢で死者に合う事」、「ナイフとハサミで生まれてくる子供の性別を占う風習」

現代性が強い思想が反映された習俗の資料や非常に古い思想を残していると思われる資料が混在している。今後、さらに一定量が蓄積されれば、これらの資料はイランの人々の世界観を明らかにするための研究に役立つと考える。この他、イランのイスラム教シーア派によって祭られるイマームザーデ等、民俗に関する画像資料を収集した。

②平成 20 年度の調査内容

イラン・イスラム共和国内において、フィールドワークによって口承文芸に関する現地調査を行い、音声資料および画像資料を収集した。イランにおける調査については、既に調査の方法が確立しており、これを踏襲した。調査内容の概要は以下の通りである。

調査内容−テヘラン州の３地点（テヘラン市内、ターレバーバード、ターレガーン）において、以前のイランでの調査を踏まえ、資料の補足と拡充を目的として、口承文芸の採録調査を行った。この結果、新規に民話、伝説、民間信仰等に関する音声資料および全話者の顔写真などの画像資料を収集した。新規に収集した資料の内容は次の通りである。

「アール」、「浴室でジンに取り憑かれた話」、「ジンとの遭遇」、「ジンの結婚式を見たこと」、「転がるカボチャの話」、「黄金虫の娘」、「月曜日に利益の中から代金を支払うことはよくないというラヴァーシュ・ナン屋の信仰」、「タンポポが伝えてくれる便り」、「小さなカラス」、「大臣と羊飼いの教訓」、「アフガニスタンにおけるヘイダルのダム」、「アリーの僕ガマルの話」、「ドアの心棒に切った爪を捨てること」、「水の流れに切った爪を捨てること」、「シャー・アッバースの話」

なお、現地調査において収集する情報の中には氏名、年齢、出身地、顔写真など話者の個人情報も含まれる。学術的に必要な場合を除いてこれらの個人情報が使用されることのないよう、情報の取り扱いにおいては十分に配慮している。

(4)民俗学的分析：上記(2)で拡充された意味属性情報を分析用の検索システムに反映させ逐次改良を行った。下記(5)で示す研究成果のうち、「イランの現代伝説についての考察」と「イラン民話の抽象的様式」については、この検索システムを使って得た成果である。

また、(1)および(2)で述べた通り、一部のデータについて、単語と語義が一対一で対応する形で意味属性情報の検索ができるようになったため、分析の精度が向上したシステムとなった。

(5)本研究に関連する研究成果：「イランの現代伝説についての考察」(『イラン研究』第 3 号掲載)、「イラン民話の抽象的様式」(『イラン研究』第 4 号掲載)、「GDA によるペルシア語文の構造化」(『イラン研究』第 5 号掲載）がある。それぞれの概要を以下に示す。

①「イランの現代伝説についての考察」(『イラン研究』第 3 号掲載）では、イランでフィールドワークによって収集した現代伝説について、現代伝説で使用される語彙の語源の傾向の観点からの考察、現代伝説の特徴と考えられる超自然的現象の内容の観点からの考察、他のカテゴリーの資料との関係性の考察を行った。なお、本研究で作成した口承文芸に関するデータベースのコンピュータによる分析手法を取り入れた。その結果、イランの現代伝説は内容や特徴については明らかに伝説に近いのであるが、話者の意識としては伝説のような「語り」ではなく、大人同士の「日常会話」の延長として話していることを、客観的に示した。

②「イラン民話の抽象的様式」(『イラン研究』第 4 号掲載）では、マックス・リュティの様式論における抽象的様式で示されたヨーロッパの昔話に見られる法則性をイラン民話の事例に当てはめて検証した。これに、本研究で作成したイラン口承文芸統語情報検索システムを用いた。特に、色彩、数、金属に焦点を絞り、分析した結果、イランの民話でもそれぞれにおいて抽象化が起こっていることが、印象ではなく客観的分析により明らかになった。ただし、ヨーロッパに見られる抽象化における具体例がそのままイランの民話に適用されるというわけではなく、イラ

ン民話で見られる抽象化の現象は「イラン的」抽象化とでも言える現象であることがわかった。

③「GDA によるペルシア語文の構造化」(『イラン研究』第 5 号掲載) では、橋田浩一氏 (産業技術総合研究所) の提唱する「大域文書修飾 Global Document Annotation (GDA)」による複数言語の構造化方式を応用する形で、ペルシア語の構造化方式の基本的な策定を行った。ペルシア語文の GDA のレベル３以上の構造化が可能かどうかを検証した上で、構造化する際の一般的な問題点を明らかにし、その問題点に対する可能な限りの対処法を示した。特に、本研究の成果として、ペルシア語文のデータのタグ内に外部辞書にリンクする実体参照値を埋め込み、元のテキストを保持したまま単語の意味情報を追加する方法を提案した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 竹原新、「GDAによるペルシア語文の構造化」、『イラン研究』、第 5 号、p159-p177、2009 年、査読有

② 竹原新、「イラン民話の抽象的様式」、『イラン研究』、第 4 号、p109-p123、2008 年、査読有

③ 竹原新、「イランの現代伝説についての考察」、『イラン研究』、第 3 号、p120-p130、2007 年、査読有

６．研究組織
(1)研究代表者
竹原　新（TAKEHARA SHIN）
大阪大学・世界言語研究センター・准教授
研究者番号：２０３２４８７４

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし